



「ダンサーはとても潔い。自分の肉体がなくなれば、その芸術もなくなるわけだから……」
——高橋館長

吉田都

Interview - Miyako Yoshida

さん(バレリーナ)

ゲスト

「だからこそ、わたしは後の時代にも残る美術作品をうらやましく思うことがあります」
——吉田さん

館長対談
vol.8

磨き抜かれたテクニックと芸術的感性を操る女性たち

英国最高峰のバレエ団、ロイヤル・バレエで15年もの間、プリンシパル(主役)として活躍してきた吉田都さん。正確無比な舞踏技術と物語性の高い作品で主役を演じ切る豊かな表現力をもつ吉田都さんとともに、19世紀末に英国で活躍した女性写真家ジュリア・マーガレット・キャメロンの写真芸術について語ります。

高橋 今日はお忙しいところ、ようこそお越しくださいました。僕は昔から、ダンサーの方を非常にリスペクトしているんです。まるで修道僧のように、ストイックで、毎日コツコツ、トレーニングを積んでいらっしゃる。

吉田 自分の体を使って表現するダンサーの宿命ですね。体はとても正直ですから、どうしても一日の積み重ねが大切になってきます。

高橋 僕には絶対にダンサーの生活は真似できないなあ。それにとっても潔い。だって、自分の肉体がなくなれば、その人の芸術もなくなるわけですから。

吉田 そうなんです。だからこそ、わたしは後の時代にもずっと残っていく美術作品を、うらやましく思うことがあります。

高橋 確かに数百年前に制作された美術作品でも我々は見ることができませんからね。でも一方で僕は、展覧会は舞台芸術と同じだと思っっているんですよ。

吉田 どういうことですか？

高橋 同じ絵でも、どういうスペースで、どんな順番に並べるかによつて、まったく違うものに見えてきます。たとえば、すべて同じ絵を揃えられたとしても、まったく同じ展覧会は二度と開催することはできない。だから僕は展覧会



吉田都(よしだみやこ) バレリーナ
東京都出身。1983年ローザンヌ国際バレエコンクールでローザンヌ賞受賞。英国ロイヤルバレエスクールに留学。84年、サドラーズウェルズロイヤルバレエ団(現バーミンガムロイヤルバレエ団)に入団。88年プリンシパルに昇格。95年に英国ロイヤルバレエ団に移籍。2010年まで22年間にわたって英国のロイヤルバレエ団でプリンシパルを務めた。07年に紫綬褒章受章、大英帝国勲章(OBE)を受勲。12年国連難民親善アーティストに就任。現在フリーランスのバレリーナとしてボランティア活動を含め、幅広く活躍中。